

日本と韓国における国土計画思想・構想, 計画技術の史的変遷

A comparative study on national land planning history in Japan and Korea

- 代表研究者 東京工業大学工学部教授 中村良夫
Prof., Fac. of Eng., Tokyo Institute of Technology
Yoshio NAKAMURA
- 協同研究者 東京工業大学工学部助教授 肥田野登
Assoc. Prof., Fac. of Eng., Tokyo Institute of Technology
Noboru HIDANO
- 東京工業大学工学部助手 金利昭
Assist., Fac. of Eng., Tokyo Institute of Technology
Toshiaki KIN
- 東京工業大学工学部助手 天野光一
Assist., Fac. of Eng., Tokyo Institute of Technology
Koichi AMANO
- 運輸省港湾技術研究所主任研究官 斎藤潮
(元東京工業大学助手)
Chief Researcher, Port and Harbour Research Institute
Ushio SAITO
- 韓国 慶北大学講師 金在浩
(元東京工業大学博士課程)
Lecturer, Kyung Puk National University
Jaeho KIN

This study is intended to find out the transformation of the traditional principle of city construction in Seoul under Japanese rule. For the purpose, we pointed out the principle of city construction in Seoul throughout Lee Dynasty, and analyzed how the principle had transformed or continued under Japanese rule. The results are follows: 1) They had attached more importance to ideological balance than visual balance in Korea. 2) The features of transformation in Seoul-Planning under Japanese rule was to put a new meaning on palace, hill, street and place-name, with accepting the several part of old meaning.

研究目的

今後の国土計画は、人間と自然が調和したものでなければならない。このためには、科学的・長期的・総合的観点から検討される必要がある。この意味で、国内外での国土計画思想・構想, 計画技術の普遍性と固有性を社会経済的諸条件を考慮して明らかにすることは重要な研究課題である。

本研究は、人間と自然の調和のための伝統的計画技術である韓国の風水思想に着目し、日本と韓国における国土計画思想・構想, 計画技術の史的変遷を明らかにすることを目指したものである。このため、本研究の主要な目的は、韓国のソウルを対象とし、第一に、季氏朝鮮時代の都城(漢城)構成原理を明らかにすること、第二に、日本統治下

の都市計画の中でそれがどの様に変容, 存続してきたのかを明らかにすることである。

研究経過

研究開始直後に, 研究者一同で約 10 日間の韓国での現地調査及び基本資料の収集を行った。この後, 逐次日本と韓国の両国で資料を収集しつつ, 韓国での国土計画思想, 計画技術に関する歴史的事実の発掘と記述に努めた。この時得た仮説を検証するため, 再度 11 月に約 7 日間の詳細現地調査を行った。

研究成果

1. 概要

本研究では, まず, 朝鮮半島の漢城(現・ソウル)の都城形成原理について, マクロからミクロへ三段階の視点から明らかにした。すなわち, 第一段階として, 都城の位置選定原理を文献調査を基に把握し, 第二段階として, 古地図をもとにその都城内における王宮等の配置や骨格的街路の構成原理を読み取り, 第三段階として, 古地図を基に都城内の末端構成を担う路地の形成原理を明らかにした。

次に, 日本統治化の都市計画の中で, これらの原理がどのように変容あるいは存続してきたかについて, 古地図を基に街路と地名に着目して明らかにした。

2. 漢城の建設思想と計画技術

2.1 ソウル(漢城)略史

「ソウル」とは朝鮮語で「みやこ」という意味である。三国時代には, 一時百済の都が置かれ, 高麗時代には離宮の設置を見たが, 本格的な都城建設の始まったのは李氏朝鮮時代である。李朝の首都には他にも鷄龍山や母岳山の南山麓などの候補があったが, 建国三年後(1395年)に漢城(現・ソウル)への遷都を敢行した。1910年, 朝鮮が日本に植民地化されても, 朝鮮を代表する都市としての地位は変わらず, 戦後は大韓民国の首都として現在に至っている。

2.2 漢城の位置選定と風水

(1) 漢城の位置選定原理

本節では文献調査^{1)~4)}を通して, 李朝建国時の開城から漢城への遷都に伴う都城の位置の選定原



図1. 風水の概念図
(文献1より)

[注]

- 龍……………土地の起伏の意味。山脈が龍のような形状をしているところから
- 脈……………龍にしたがって流れる陰陽の生気の流れを脈という
- 穴……………龍脈中に最も生気の集中するとされる場所
- 祖山宗山…来龍(穴に至るまでの龍脈)の中で, 穴から最も遠く高大な山を「祖山」, 近くて高い山を「宗山」という
- 主山……………来龍中, 穴後に高くそびえる山をいう
- 青龍白虎…穴後の来龍から出て, 東方から穴を囲む山脈を青龍, 西方から穴を囲む山脈を白虎という。この呼び名は守護神としての四神(青龍, 白虎, 朱雀, 玄武)のうち東方と西方を護衛するものから来ている
- 明堂……………穴前(陰宅は墳前, 陽基なら建築物の前)で, 青龍白虎に囲まれた場所をいう
- 案山……………穴前の低小な山
- 朝山……………これも穴前の山であるが, 高大な山である。四神の中では朱雀に相当する

理を考察した。この結果, 漢城の位置選定については, 漢城が国土のほぼ中心にあることや, 大河川漢江によって内陸部とも連結されていること, 山地に囲まれていて軍事的に有利なことなどの特徴が指摘されており, 純粋に風水地理説のみによるものでないとも考えることもできるが, 位置選定の過程の中で, 常に風水地理説からの視点が問題となっていることから, 風水地理説は位置選定の

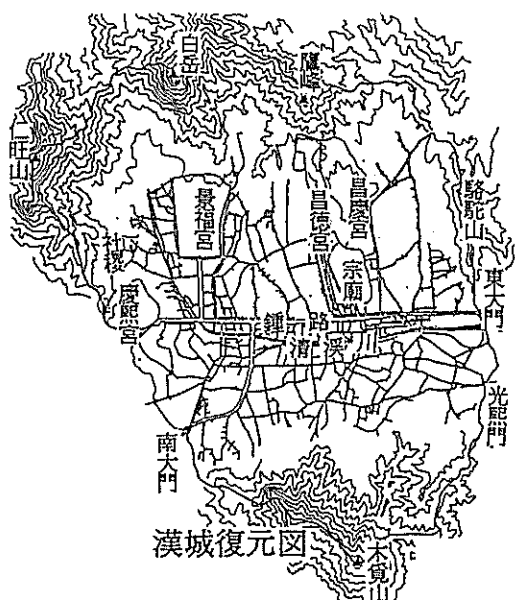


図2. 漢城復元図
(文献1~8より作成)

方法としてはもちろん、位置選定の正当性を示す根拠として機能していたことは間違いないと言える。

(2) 風水地理説について

風水地理説について、その概略を紹介する^{1,2)}

風水思想は新羅時代に中国大陸より伝わり、新羅、高麗、李氏朝鮮時代を通して朝鮮半島に住む人々の生活に少なからぬ影響を与え続けている。風水地理説の目的は、「人生を天地の間に託して、繁栄を得る」というところにある。つまり人間は、必ず天と地の間にあるから、それ以外のものに頼っては生きていけないという意味である。天と地の内、人間の生活は、もっぱら地によって育まれることから地を「母」とする考えが発生したとされている。風水において吉地とされる地形の概念図を図1に示す。この概念が実際に漢城の地形上にどのように適用されたのかについては諸説ある。

2.3 都城の骨格構成原理

ここでは文献^{1~6)}、「首善全図」⁷⁾、陸軍陸地測量部1921年作成の一万分の一の地形図⁸⁾を用いて都城の骨格構成原理を考察した。「首善全図」と

は、1820年代に金正浩の作成した李朝時代随一の「実測地図」である。「実測地図」とはいえ、長さや形は正確であるとはいえず、実際の様子を分析するには適当ではないため、陸軍作成の地図から「首善全図」に見られる街路を抽出し、図2を得た。これらを用いて以下の分析を行った。

(1) 都城内部の配置原理

2.2で述べたとおり、漢城の位地選定には風水地理説が大きな影響を与えており、王宮の立地もほぼそれを踏襲した形となっている。つまり、景福宮の位置は風水地理説で説明すると、明堂水である清溪川に挟まれた「穴」に相当し、離宮である昌徳宮は、周囲に堀を巡らせることで「穴」としての意味づけを行っている。いったん王宮の位置が定まると、それ以外の諸施設の配置については、同じく中国大陸伝来の「左廟右社前朝後市」の原理の影響が強くなっている。この原理とは、宮殿から見て、右に社稷、左に王廟、前に朝つまり六曹（政府機関）を、そして後ろには市を置くという意味である。ただし、漢城の場合実際には北に市はない。漢城では王宮（景福宮）を中心に社稷と宗廟が一応対称を示しているものの、北京の例のように厳格な幾何学的対称を見せているわけではない。また、「首善全図」より、景福宮は、北に風水地理説の主山である北岳山を背負っていること、街路のEye stopとなっていることが読み取られるが、山、街路、王宮の軸線に関連は見いだしにくい。

以上から判断すると、都城内の配置でも、風水地理説や、「左廟右社前朝後市」の原理が適用されているが、その際、平面上の幾何学的バランスよりも観念世界上のバランスに重きが置かれていたと考えることができる。

(2) 都城内部の骨格街路

街路については、経国大典⁹⁾（1945年編纂）に「都城内道路大路五十六尺・中路十六尺・小路十一尺」との記述がある。しかし、これらが具体的にどの街路を示すのかは、ここでは言及されておらず、李朝期の街路について詳細は不明である。李朝後期の城内の街路幅員について『日本地理体系12朝鮮篇』⁴⁾の記述によると光化門通（現・世

宗路), 鍾路及び南大門通(現・南大門路)の三大街路および宗廟や昌徳宮に至る道を除いて, 曲がりくねった路地であったということになっている。また, 「首善全図」では光化門通以外の大路には路地が平行に走っている。これらの事実は, 併合当初に日本陸軍の作成した地形図からも, 如実に読み取ることができる。地形上の制約から南北方向の道が多く, 東西方向の連絡は貧弱である。細路ばかりでなく大路でさえも城門から王宮まで直進できるように接続されておらず, 都市内の移動を考慮した計画であるとは考えにくい。このことは, 大路の機能には, Eye stopにある建物の象徴性を高めるという意図や, 日本の城下町に見られる「鍵辻」のように, 敵の侵入を困難にするという目的の優先順位が高ったためと推測される。

2.4 路地の形成原理

漢城の骨格構造の末端を担う路地の形成原理について, 現在の地図¹⁰⁾上から地割りと路地の関係を捉え, 文献調査¹¹⁾によりその形成原理を推測した。

首善全図にも見られる古い路地が, 日本時代を経て存続している「会賢洞一街」を対象として地割りと路地の関係を整理すれば, 次の三つのパターンに分類することができる。

- ①路地引き込み型(6例)…路地の行き止まりに比較的大きな地割りが存在している。
- ②路地挟み込み型(9例)…一つの地割りが路地を挟み込んでいる。
- ③路地張り付き型(46例)…小規模な地割りが路地に張り付く。

これにより, 次の2点の特徴が指摘できる。①大路地の行き止まりは地割りが大きい②路地の規模と地割りの大きさには関係がある。また, 文献¹¹⁾には, 路地の形成過程に関する記述がある。以上から, 一見不規則な漢城の路地には, 階層的発展形態を持った形成原理の存在することが推測される。

3. 「京城」の建設思想と計画技術

3.1 「京城」都市計画通史

日本は日韓併合以前の1907年から市区改正に着手している。統監府は南大門より南大門駅(後

に京城駅, 現在のソウル駅)に至る道路(現在の南大門路五街)の拡幅を行っている。1912年10月7日, 朝鮮総督府は「訓令第九号」として市区改正に関する訓令を発し, 同じ年の11月に「京城市区改修豫定計画線路」として29路線を公示している。これは, 1917年に2路線追加, 1919年に17路線追加・3路線削除を経て, 計44路線となっている。内地の都市計画法制定公布の影響で, 朝鮮総督府は「都市計画令」を立案したが, 公布には至らなかった。しかし, この年以降総督府は, 京城, 釜山, 平壤, 大邱の四大都市について調査立案を進めた。京城都市計画案は, 1929年に第一次案が, 1928年に第二次案が, 1930年に第三次案がそれぞれまとめられている。1930年頃の新興工業都市の勃興に対処すべく, 朝鮮市街地計画令が公布された(1934年)。朝鮮市街地計画令の内容はおおむね内地の都市計画法と市街地建築物法を合わせたものであった。

3.2 街路に見る都市の骨格構造の変化

市区改正当初(1912年頃)は市街地の中心に広場を設け, そこから放射状に街路を配すなど西洋的な発想がみられる。公示29路線の内1, 2, 3番は景福宮と京城駅, およびそれに連なる日本本土とを連絡するものである。番号が若いことから考えて, この区間の連絡が重視されていたものと考えられる。1番の路線は李朝時代は王宮前の街路として, 王宮の権威を演出する効果を持っていたが, この時点で日本との連絡を担うという新たな役割が加ったといえる。この三路線の設置に伴い, 京城駅から景福宮・光化門に至るまで, Eye stopの連続景観が形成されている。1928年に立案された第二次京城都市計画, それに続く1930年の第三次案で作成された都市計画図では, 街路網は東北方面や, 汝矣島対岸の永登浦方面に広がっている。旧城内では総督府前広場から斜めに伸びる路線が完全に姿を消している。このように, 「京城」の街路骨格は, 一連の都市計画によってグリッドパターンに近いものとなっている。

3.3 地名にみる文化の受容姿勢

地図上から読み取れる最も顕著な変容は地名である。本節では, 日本時代の日本式町名を分析す

表 1. 京城府内の日本式町名の分類

区分	地名の変更方法	事 項	影響
①	日本人（総督・軍人等）の名又はその行動にちなんだもの	古市町, 竹添町, 長谷川町, 岡崎町, 彌生町, 大島町, 御成町	日本 ↑
②	日本の国家的意味のあるもの	明治町, 大和町, 日出町, 旭町	
③	李朝時代の名前を日本式に意識したもの	和泉町, 茶屋町, 黄金町, 若草町, 明治町, 大和町, 壽町, 花園町, 櫻井町, 北米倉町, 南米倉町, 青葉町	
④	李朝時代からの建築物等の名称によるもの	西大門町, 舟橋町, 水標町, 長橋町, 武橋町, 光熙町, 永楽町, 太平通	
⑤	李朝時代からの名前をとって洞と町を変えたもの	蓬萊町, 林町, 笠井町, 水下町, 南山町	↓ 朝鮮
⑥	自然・社会的条件を描写したものの	吉野町, 芳山町, 三角町, 初音町, 並木町, 東四軒町, 西四軒町, 三坂通, 京町, 榮町, 岩根町, 山手町, 清綿町, 漢江通	

表 2. 都市計画変容にみる「意味の読みかえ」

パターン	場 所	意味の変化
強 調	南 山	風水地理説の案山→日本人の聖地
再 編	光化門前道路 他王宮前道路	景福宮の演出→日本本土との連絡 王宮の演出→都市内空間の連絡
転 換	光化門前道路	李王朝象徴の演出→日本統治象徴の演出

ることで、ソフト面での都市計画変容を考察した。日本式町名は、日本人の居住の割合の高かった南北側斜面および龍山付近に分布しており、これらは表 1 に挙げた方法の内いずれか、ないし組合せによって名称が変更されている。グループ①は「長谷川町」を除いて旧城外に、グループ②は南山の北側斜面の日本人居留地を中心に分布している。明治町（旧・明洞）や大和町（旧・倭館洞）は、国家的な意味を持ちつつも、旧称の要素を受容した形となっている。グループ⑥は李朝時代からの要素を直接受け継いでいないが、すべて旧城外に分布している。このように旧城内の日本式町名はおおむね旧称を受容しているといえる。

3.4 変容の分類

以上明らかにしてきた日本統治下のソウルの都市計画変容には、意味あるいは形態のどちらかが

表 3. 都市計画変容にみる「型の組なおし」

継続された意味	対 象	形態の変化
統治機能の中心	景福宮	朝鮮総督府設置
地名の表す意味	旧城内の地名	朝鮮式地名→日本式地名

存続された例が多くなっている。ここで、意味が変化して形態が存続した例を「意味の読みかえ」、形態が変化しつつも意味が継承された例を「型の組みなおし」と定義した。意味の読みかえには三つのパターンが見いだせる（表 2）。かつて風水上の案山という意味を持っていた南山が、日本人の聖地という意味に変わっている例では、朝鮮出兵の際に日本の武将がこの地に陣を張ったという言葉伝えを強調している。景福宮を演出していた光化門前の道路が、日本本土との連絡を象徴するという意味を加えている例や、やはり、他にも王宮を演出していた道路に都市空間の連結という意味が加わっている例では、意味を再編している。また、光化門前の道路は、李王朝の象徴の演出から日本の統治の象徴の演出へと意味が転換している。

型の組み直しには 2 例見いだせた（表 3）。朝鮮総督府の設置によって、景福宮の伝統的な王宮の形態は破壊されているが、統治機能の中心という意味は継承されている。また、旧城内の地名は、

朝鮮式から日本式に改められているが、地名の持つ意味はおおむね継承されていた。

4. おわりに

以上のように本研究では、文献・古地図・実測地図などを用い、植民地化以前のソウルの都城構成原理を明らかにした。これにより以下の点が明らかとなった。①都城選定における意義付けという点で、風水地理説のもつ地位は極めて大きい ②都城内の諸施設の配置においても、風水地理説や「左廟右社前朝後市」の原理が適用されているが、その際視覚的・平面幾何学的なバランスよりも観念世界上でのバランスが重視されている ③都城内の街路は王宮等主要建築物の演出という機能に重きがおかれている ④都城内の構造の末端を担う路地は、一見無秩序のようであるが、階層的発展形態を持った形成原理が存在すると考えられる ⑤日本統治下の「京城」の都市計画変容は、都市の骨格レベルや表層的部分については、従来の要素の一部を受容する「意味の読みかえ」や「型の組み直し」という概念を導入することで説明できる特徴が存在することを明らかにした。

今後の課題と発展

本論文は李朝時代の漢城の都城構成原理を多面的に考察したものである。韓国では、風水地理説など一部分については研究が行われているが、多面的に概観した例はなく、我が国においては皆無と言える。又、李朝時代の状況を類推する際には、従来はもっぱら「首善全図」などの古地図による以外に方法がなく、李朝時代の街路の状況を精密に復元することは期待できなかった。このような

状況のもとで植民地化（市区改正着手）初期の地形図を用いて、都城内の構成原理を分析した研究は、今までに例がない。このような状況下で、本研究は一応の成果を得たが、今後の課題は以下のとおりである。

- ①国土計画思想・構想，計画技術に関して，個別，具体的な事例の発掘を継続的に行う（河川や緑地などの個別都市施設，他都市や農村）。
- ②さらにその事例の社会的・経済的・文化的意味を明らかにする。
- ③日本と韓国の比較分析を行う。

参考文献

- 1) 朝鮮総督府(1931): 朝鮮の風水, pp.8~20, pp.876~692, 朝鮮総督府.
- 2) 崔昌祚(1984): 韓国風水思想, 韓国ソウル市.
- 3) 国史編纂委員会編(1982): 国史, 大韓民国文教部.
- 4) 改造社編(1930): 日本地理体系 12 朝鮮編, pp.27~43, 改造社.
- 5) 金儀遠(1984): 国土履歴書, 韓国ソウル市.
- 6) 京城府編(1937): 京城府史 第一巻, 京城府.
- 7) 金正浩(1825): 首善全圖.
- 8) 陸軍陸地測量部(1915): 1:10000 地形図「京城」, 陸軍.
- 9) 朝鮮総督府枢密院(1934): 経国大典, p.525, 朝鮮総督府.
- 10) 中央地圖書文化社(1989): 新編 特別市 地番略圖, 中央地圖書文化社.
- 11) ソウル市〈根の深い本〉編(1989): 新韓国風土記 第1巻, 読売新聞社.

発表論文

日本都市計画学会または土木学会に論文として発表する予定である。